

本年も我々松涛一門有志が長年欠くことなく続けている恩師、船越義珍師範の松涛祭が丁度師の五十回忌と合わせて鎌倉円覚寺で盛大に行われ改めて師の徳を深く慮った次第でした。

思えば昭和二十二年私が慶応義塾の旧制中学四年で空手を始めて間もなく秋季大会が行われ、白髪の師の前で一人で平安初段を演武したのが最初でありました。それから丁度もう六十年になる。

長い間いろいろな変遷がありました。全日本学生空手道連盟の創立、全日本空手道連盟の創立、試合制度の創設、その夫々の軌道化、日本空手協会の創立、松涛同門会の創立、それらに大なり小なり今まで携わってきたものとして今日の世界的隆盛は感慨を覚えます。又、その間多くの関係者が広く世界で自分を忘れて空手の為に奮闘してきたことは特筆に価すると考える。

次に本文での空手の技術的意見は基本動作、と組み手関連、に止め、形については個々に流派や道場や部のお考えがあり私の触れることではないと思われるので差し控えます。

(1) 空手の試合制度の誕生

昭和 27 年秋もうそろそろ早稲田との交換稽古が近づいたと思っていた頃、突然三田の慶大道場に早稲田の大島主将、以下数人の幹部が見え『今年も交換稽古の時期になりましたが、今までの交換稽古は全く武道としての礼節もなく、学生としての誇りもなくわれわれ早慶両校の学生が行うべきものではないと思う。ついでには早稲田の空手部でこの夏、空手の試合制度を創ったのでそれでやってみませんかとお話があった。私はまだ大学三年生だった、慶応もかねがね同様にこの交換稽古に問題を感じていたのと、空手を試合形式で行うことも同時に夢であったので之も誠に新鮮であり、ええ是非やりましょうとお答えし、審判を後の日本空手協会最高師範中山正敏師と、後の全日本学生空手道連盟副会長兼拓殖大学空手道部OB会会長福井功師以下拓大OB方をお願いして、同年 11 月の良き日に早稲田大学の道場で挙行することとした。われわれ部員たちも大げさでなく歴史上意義あることと自覚し真剣に稽古を続けた。一方、OB にも報告が必要と考え、当時は未だ監督制度も判然としていなかったが最長老である小幡先輩にご報告し何の反対もなくご了解を頂き、当日も OB は小幡さんが一人お見えになっただけであった。結果は 7 対 4 で早稲田の勝利であった。これ以後又早慶の親密度はいっそう上がり、当事者の大島さんと私は一年大島さんが先輩にも拘らず今尚、生涯の信頼すべき友としてお付き合い頂いている。

長い空手の歴史の中で遂に空手の試合時代の幕が開いた、しかもそれが学生達の創造と合意によって友好的に成功に至ったことは大変喜ばしかった。両校部員たちはこの試合の認可をOBから受けたと言うよりも報告によって全く異論なく了解をいただいた。その後この試合ルールは国際的状況の中で何度か変更を余儀なくされてきたが根本的には形(かたち)を残して現在にいたっている。即ち、試合時間は審判の協議及び、選手の場外時間を除き一人実働二分、一本勝負、技あり二本、主審一人、副審四隅の四人、試合監査役一人、試合場面積四間四方、選手一校五名、監督一名、その他この試合に限り初回のことであり審判を全て拓大OBをお願いすることとし早稲田の道場で挙行された。当時早稲田は学生連盟三段を4人も揃える日本一の勢力、拓大もこれと並ぶ三段三人の共に全盛時代であった。出場選手は早慶両校共に15名。こうして世界空手史上正に初の、歴史に今もって残る空手の試合が行われたのだった。そしてこれが早慶

両校の相互の信頼と友情によって成り立ったと言う満足感を持ったのだった。やがてこれが昭和32年の全日本学生空手道連盟の設立と全日本学生空手道選手権大会、そして39年の世界空手道連盟の設立と第一回世界空手道選手権大会へと発展して言ったのであります。その後試合ルールの補足、訂正を経て現在すでに世界空手道連盟としての正式ルールとして公認され世界的空手発展の基として今日に至っているという過言でないと思います。

(2) 空手の大きな環境変化。

武道、武術とは歴史的に日本人の精神史との関わりが浅くないものとするが基本的に各人の自由な選択によって自らの生き方を正直に、正しく、正義観と責任感を持って生きようとする、それは基本的に人間の幸福にも繋がることでもあり同時に道場夫々の持

つ精神的根本ともなる「訓」とも通じると思われまふ。そして道場夫々が持つ道場としての在るべき姿、志向して求める姿が描かれてゆくことになると思ひます。それは民族や国家の歴史に根ざした文化や、更に大きな人間の新しい自由な融通無碍なる世界へいざなうものか、いずれにせよ、将来から未来の方向に向かつて行く先が静かに求められて行くのでありまふ。今から50年前に試合制度が出来て、此れは結果的に空手を大幅に現実的なものにしましたが、その極く初期にはこの試合制度を採用して押し進めた学生空手道連盟の委員たちは、それまでの概念の中にあつた人から同時に又我々学連側にも不備が多くいろいろと批判を受けた時期がありました。然しそれもいつの間にか消えてしまひましたが、今は試合というものを、どう捉えたら良いかと思つたりもする。戦い、勝負、戦争、戦(イサ)、腕試し、これは唯、漢字のテストのつもりで並べたのではない。この中で戦い、勝負、が端的にして当事者たちの心理状態を言い当てて迫真の気にも通じるが私は更に一つ『戦争』という言葉を取りたい。しかし最近の試合に対しては今ひとつ表現に欠けたものがあるように思ふ。それは今すでに試合は、学校同士の対校試合など団体戦は勿論、個人戦さえも組織による組織の力が試合を動かしていることを見逃すことは出来ない。

それは読者に同意をいただけるか。戦争とは組織目的に対する最高に精緻に合目的に運営された科学的総合力の発揮ではなからうか。勿論、平和であるべきことが何よりであらう。

個々の試合の相手チームの戦略と戦術の調査と想定、その代案の想定と準備、そして試合当日の対戦相手の全体及び個々の力量、戦略、戦術の調査と想定と代案の用意、心理上の準備と作戦、応援並びに休養、準備アプローチの実施、栄養補給、マッサージ、声援、応援体制、等々以上の可能な範囲の実行。次いで試合制度の設立に伴つて空手が一般に普及し急激に人口が増加したことが特筆されます。特に本件について詳細を列記する考へはありませんが、これは思ひぬところまで影響を広がっていることであらう。

そして技術の変化に目をやれば、要約すればスピードが大変に上がったことが特徴的事実でありこれが鈍ることではないであらう。これは全ての運動競技における世界の代表的潮流であります。スピードと切れに取り残された技術は全て落ちこぼれます。そして更に忘れてならないのはサッカーなどでもはっきりとわかるとおり全体を広く通して見る見方です。是によつて組み手を見る見方が根本的に変わつてくるのではないかと考へます。監督やコーチも個々の選手の組み手の戦略と戦術を錬る上で時には死活的な差が生まれるのではないであらうか。サッカーのオシムが先ず90分駆け続ける体をつることを選手たちに要求しました。是からがポイントです。どう言うポイントと、どのようなハーモニーと、どこにバランスと相手を見て捕らえる目と、少しでも変化の予兆とそれを捉えて「先の先」を押さえて我が物に獲得するまでに至る戦略と戦術を組み合わせた瞬時の「解」を生み出すかをじっくり見たいものだ。更に一つの試合についても是に対する対応は戦略と戦術の二つに分かれることであらう。

たる場合に事前の調査で A の身長、体重が 180cm 75kg 前年試合実績 4 勝 2 敗 内 3 勝は前蹴りで前方へ飛び込んで取っているが 2 敗は中段に飛び込まれて正拳で取られているとしたら監督は如何指示するか。そして注意はどのようにする。等々。これらは実際には当然もっと現実的且つ詳細にわたることとなる。

次に代案とその活用について。事前情報の入手によって代案が生まれる。その正確度によって代案以後の命となる。代案以後の命は立案者と選手の能力によって決定される。総合評価として事後分析と関係した全員のコメントが当然求められる。是は全員が真剣に部と仲間に対する責任を果たす強い意志と、義務感で是に青春の情熱を皆が心一つにして一体となって進め、青春の感激と喜びを共有して味わう忘れられない時代を仲間たちとともに是非作ってもらいたい。是は皆が真剣に心一つにしなければ叶うことではない。一生の思い出。こんなこと出来る奴いない。又、代案には時として妙味のあるものがある。若し今、船越師範がいられたら『空手二十か条』を二十一か条にして『代案に妙味あり』と云はれたかもしれない。

空手が外来格闘武術と試合した場合について、我々側の頭にあがることは体力と力であろう。これが力とリーチの差について考えなくてはならない点となる。これに対して何を以って対抗してゆくか、その相手に対して最小限、決め手を一本取る為の必要体力は欠かすことは出来ないが所謂、体力そのもので相手と同等若しくは以上のものを備えようと努力することは甚だ効率上に多くの場合問題を持つと見るのが正しい。と言うことは効率的に考えて決め手を取る為に外来者と同等又は以上の体力を備え想像以上の時間と労力を必要とする。それは技術力、集中力、具体的には相手のウイークポイントに狙いを置き其処に隙を見つけ出すことに成功すれば一気にスピードをもって攻撃を連続して集中し、その途中でも不調と見れば退くなど慎重に対応し、それらも手を変えて繰り返して目的を達成することが、簡単ではないかもしれぬが相手もこのような攻撃には不慣れであるゆえ意外に簡単に一本取れるはずであると思う。初期段階では当方も不慣れで問題もあるかも知れぬが当方が事前に自覚して準備を積んで置けば相手も同じ人間故、意外に当方の成功率は高い筈である。要はこの場合徹底して果敢に攻撃を続けた者の勝ちである。

空手は試合制度が生まれて既に 50 年、急激に一般化して人口を増やすと共にスピード、破壊力、更に相手の弱みに付け入る体の線も(立ち足による)技術的にも、本能的にも相手を読んで是を攻撃して一本取る技術を手中に収めつつあり頼もしいレベルになりつつある。実祭には空手と外来武術との直接の競合は現時点では僅かと思うが今後次第に現実化の可能性も考えられ、備えは必要であろう。これらに空手家が遅れることなく備えるべきことは武道家としての本来であり本能であるべきです。先ず私は格闘武術の中で一般に間合いが遠いほど、例えばレスリング、相撲から、次第に柔道、空手、合気道、剣道と至り間合いが広がり、相撲の出会い頭の叩きこみや、肩透かしなどを除くと間合いが遠い種類の勝負がやはり体力を超越しやすい勝負となっていると考えるが其処から自分の決め手が取れる間合いまでへの具体的な入り方が誰にとっても重要な研究課題なのでしょうが日ごろの組み手稽古での相手との間合い、線の取り方の研究の積み重ねと考えるべきと思う。後述の伊藤俊太郎さんは、記述の如く組み手の不世出と例えてよい名手だが、常に『組み手は感と、腹と、スピード』と言っておられた。「腹とは相手のどのような挙動、行為、変化にも当方が気を動かすこと、影響を受けることなく、動ぜず待つこと、一気に身を捨て切って全霊で撃って出ること、退ること、交わすことなど自在に最大の速度で何時でも無意識に近い対応が可能なこと』と考えている。尚、伊藤さんをご自分の黒塗りの大型キャデラックの後部トランクにいつも稽古着、巻きわら、巻きわら棒、釵〔木製の棒(時には金属製もある)を受ける道具で一般に金属製。攻撃用具にも兼用される〕、備前物の肉厚の鎧通しの短刀、など一式を入れて持ち、

時には自分で運転して出かけることもあった。全日本空手道連盟に笹川良一会長をお招きして会長に着いていただいたのもこの伊藤さんと、明治大学OBの佐藤さんが進められたとうかがっている。

(3) 格闘技の中の空手

実は私は日本に於ける現在の格闘技の中で空手が最も勝算ありと確信している。それはこの数年で具体的に現れた組み手の技術レベルの進化が更に実際に相手から決め手を取ると言う段階の間合いで、一部の高段者で其処に絞った研究を深化させ、当然是に伴う前後の技術も同時に具体的に深化し十分期待できる段階に在ると考えている。

私が空手に最も勝算ありとする根拠はすくなくありませんが、

A. 空手には破壊力抜群と言える決め手が、前蹴り、後ろ蹴り、猿臂、頭突き、正拳等多数ある。しかも猿臂では基本的に5通りの使い方を全て正確にこなせる人は必ずしも多くはない。勿論それは単なる肘の動きを知るのではなく腰の入れ方と引き手とのバランスであり体全体の一致のことである。是による強烈な破壊力がある。

B. これら決め手の効果的な実際の使い方は大別して2つあるが、それらの有効な使い方を本当に知る人は決して多くない。その理由は一つは今まで日本で『如何にして自分の決め手を取るかの研究が具体的に徹底される機会が必ずしも多くなかったからだ、教えると言う以前に、教える人、教えることの出来る人、その自信のある人が想像以上に少なかったのかもしれない。その意味は一つ猿臂の使い方のみならず、例えば猿臂のように腰を落として極く近い間合いまで入って最も有効な決め手を使いたい決め手は、その間合いまで入ることに工夫が必要である。そして更に最大の効果を実現するための体全体の一致を実現するための技を欠かすことが出来ない。

有効な決め手の具体的実用法は2つあると、先ほど触れたが、その1は自分の決め手の有効間合いへの入り方のHOW TO 即ちいかにして自分の決め手の有効間合いに入るかの、入り方である。そして残る一つは、有効の間合いへ入った後、直ちにどうして現実に決め手を取るかである。それは相手の何処へ、どのような体制で、どういう角度で相手から何処の急所を、何の手で、要するに何の手で、どう取るか、之を瞬時に判断するしかない。之はその場全体の、瞬時の判断から来る高度な計算から来る「解」であり判断だ。難しいことではない、今まで皆がやってきたことだ、その計算の瞬時の行程をルールとしてのみこめばよいだけだ。但し形、基本動作と根本的に異なるのは相手が生きていて、自分も生きていて必死に動き現時点の瞬間以後も引き続き動き続けることが必要だ。どうして之に慣れてゆけばよいのか。縄跳びトランポリンかあるいは少し緊張した場面に自分をおいて一人で少し自由に飛び跳ねている間に気づく瞬間が生まれてくるのでは、或いは、真剣必死の場に己を置きその場で活を求めるうちに生まれてくるものが最後に得られるか。そして之をくり返して身につけるか。そんなことを気が向くままにやっているうちに生まれてくるかもしれない。それでない場合はやはりルールのような基本の動きを作り、これを真剣に繰り返し徹底してマスターするほかないと思う。相手に対する間合い and 角度、この角度も是非忘れないように願いたい。又、間合いに入る少し前から狙いをつけておかなければいけない。但し、相手に悟られないように、しかもその狙いは途中接近する過程で敵の変化を見ながら之に対応しなければならない。易しいことではないがサッカーの選手なら皆やっていることだ。と考えると之に近づく為の努力と繰り返しが是非必要と考えざるを得ない。

さて、最終段階である。攻撃を始めたならばもう、天が自分に生きるために与え賜った最後のチャンスだ、自ら何もかも賭して断じて行うまでだ。之で自分の力で取れなければ死んでしまえ。

そこで空手がやはり有利な武術であることを伝えておく。空手が体力を特に消耗することなく連続技を繰り出せること。之と同じくスピードを落とさず他の技を連続して繰り出せる点もある。之は一般論で

比較的有利という程度のことである。空手は極手を打ち出す為に要する（連続攻撃も含めて）比較的体力の消耗が少ない格闘技であると云える。

間合いが違うことによって、勿論武術の性格からしても空手の敏捷性と打撃力、を生かすか死なすかは諸賢にあるのだ。

試合の最中に相手に自分の決め手の狙いをつける、かなりのレベルの男がいる。ご希望があれば本人に照会するが先方も多忙な大学院生で都合をきかなければ分からない。学生連盟ではなくその関係での全日本の選手権を取っている。翌年では三位であった。

我々武術を志す者は道德水準の向上と外来武術への備えを本能的に意識すべきです。外来武術への備えは平素の心構えが肝腎であると同時に武道を志す者の本能で在るべきです。

終戦直後の一時期までは空手をやるものに外見上のガラの悪さや粗暴な振る舞いが目立った。他の体育会系で所謂、粗野さや素朴さはあっても素朴さとは違って、同じ体育会で肩身の狭い恥ずかしいような思いがあった。むしろ粗野には男性らしい素朴さと親しみを感じたものだが。それが近頃はまったくと言ってよいほど柄の悪いのは見かけなくなり空手の名誉のためにも嬉しいことと思っている。

後屈立ち手刀受けも、半身以上に無理に体を真横にして正面から見てまっ平らにまで体を開こうとするとどうしても不合理がでてしまい本来の目的よりも、かたちを作ろうとすることが勝ってしまい、これに気付かぬままに更にかたちにはめ込もうとして不合理性を高め、そもそもの受けが損なわれてしまう場合が事実上あると思われ受け手の立ち方を猫足に変えるべきだと思いますがいかがでしょうか。

(4) 猫足立

猫足立ちは柔軟で移動、変化ともしやすく後屈立ちと比べて腰をやや後方に引けば懐も深くなり受身の立ち方として幾つも条件が備わっている。個々にもこの受け手としての立ち方の優れたところが現れていて、もしいろいろな事情で猫足立ちに変更が実現しない場合は次善の策として手刀受けと猫足立ちの両方を広く受け入れ、全空連公認として一般に猫足立ちの立ち方の解説等広く全空連の組織力を活用して実施して、手刀受のみに限らず他の受けや構え、或いは構え、移動、攻撃にも広く空手に活用すれば結構なことと思うが如何でしょうか、合わせて全空連組織を通じて立ち方指導を行い一定期間をかけて審査等の受験者が広く猫足立ちでの受験も可能となれば空手修行者にとって広く猫足立ちも演舞可能となり大変喜ばれることとなると思います。事実流派が違うと他流の情報は入手に意外に手間取ることがあり、あの妙味と奥のある立ち方が広く伝えられれば空手界にとって大変有益なことと存じ是非実現を期待するものであります。松涛館は猫足として有利となる点が多くなると考えられるのだが、又別の視点からも、少なくとも現在日本あるいは世界で使われている空手の挙動即ち受け手、攻撃手、或いは形などその大半は数百年も以前に出来て、それ以来まことに長い間、改良若しくは殆ど変化することもなくそのまま使われ続けている。一方現在、空手と対応する周辺の武術は世界の自由市場の潮流に乗るかのように日本に上陸して、より合理的なものが選択されつつある。何か形にはまったようにことが改めて驚くほどに、まったくと言ってよいほどに、技の上で生まれたり表われたりしないのである。これからも更にその傾向を広げるであろう。外来格闘技の場合は殆どプロたちが対象ながら空手の場合は小中学生も大いにその対象であって今日の空手人口の顕著な伸びは関係者の日ごろのご精進の結果と敬意を表するものであります。

格闘技この意味からも猫足を更に研究して活用範囲を広げるべきである。これは一重に全日本空手道連盟を先頭とする日本空手協会その他、大、小全国の空手実技団体道場組織の広く全国の小、中、学生等

に対する言わば草の根運動等諸活動の成果と敬意を持っています。唯一つ申し上げさせていただければ稽古方法であります。これは今、他のスポーツと比べ余りに遅れていないでしょうか？

(5) 勝利における執念

サッカーの試合などでのあのゴール前での執念はさすがだ。私は、今、サッカーの選手はゴールを目指した瞬間から、その間の経路のマップを自分の頭に描き始め、大事なのはその後、攻守が入り混じっていろいろと変化しても大体の予想を下にマップを直ちに描き直して、その現在の場面から次を予想しなおして直ちに攻撃態勢を頭の中で組みなおしてかかって行くことが常識となっているのだろうと思う。唯それはわれわれにしても結局同じことで組み手の間はもっともっと緻密なことがもっともっと敏速に処理されて進められているのだろう。もっともっと敏速な死闘が頭脳の中で繰り広げられているのだろうと思う。空手はサッカーよりも難しい面も多い代わりに人数は当人一人でありこの辺は決め手を取るまでのマップとして是非研究してみたらいかかと思う。

最近又、外来格闘武術に関連して新しいことに気づきました。実はそれら武術に本来備わっていると考えられてきたもの、例えば同じ外来格闘技で試合する日本人選手が試合中に得た優勢のチャンスを更に自らに精神的にも心理的にも活用して自らを鼓舞し、上乘せして活用できるようになってきた面白い場面を時折みていることです。それは全柔連が目標としていた、上村春樹氏が読売新聞に書いていた「国際化」の影響、即ち選手一人で外国へ出し勝てば更に一人で手続きをさせて転戦させるなどの、影響を受けているかもしれません。

(6) ボクシングから学ぶ

ボクシングの試合を真剣に見るのは空手、K 1 以外では最も勉強になると思う。

私は戦後のボクシングのヘビー級の世界選手権のTVと、昭和22年頃からのフライ級の世界選手権の日本で行ったときの実際の試合は殆ど見えています。各選手の試合スタイルも大ざっぱに記憶しています。これが空手と、試合審判の経験が長くなるほど目が慣れて面白くなります。そしてそれが事実大変に勉強になっています。やはりこれがボクシングでは実際に当て合っているためです。諸賢にもこれからは是非見ることをお勧めします。ただ空手ではグローブを作る技術的困難な問題がありこれを解決することが前提問題としてあるようです。ヘビー級の迫力はやはり本物の部類に入ります。昔なら戦前一世を風靡したイタリー系のジャック・デンプシ、これはパンチを上からまわすように打つ、まわしながらうつ等々、夫々特徴をよくおぼえている。現在、ついに日本で本物のボクサーかと思われる若者が一人現れたかと思ったが後で聞くと随分弱い相手とやっていたようで残念だ。昭和二十年代晩期、白井の戦評を米紙に「リングの上をウサギのように逃げ回った」と痛いところを衝かれているのを日本紙が書いたのを読んだが、それが日本の当時のボクシングだった。ボクシングは本来は箱の中で打ち合いをする、これが米国のスタイルだった。唯、白井はやはりシャープでフットワークも良かったがしかし守りと逃げであった。ただパンチの出にはシャープさもあり一流と言えたのではないか。白井の試合も4、5回は現場で見ている。

(7) 空手の問題点

皮肉な言い方を取れたらお許してください。空手は古くから続けてきたことを変えることは許されていないと言う定めがあるわけではありません。空手関係者が生き残って行く為にも、商業競争社会で、又、武術競技の競争社会で共に勝利してゆかなければなりませんがこのままでは成り立ちません、決して安

住の地にはそれは成り立ちません。

過去、私が考えてきた空手の問題点に関わることを列記させていただきます。

後屈立ち手刀受けで左右のかかどが直角となるような立ち方はどうしても何か昔、今では想像しにくいようなマイナーな意味があつて決めたものなのかわかりませんが、若し現在特に必要がなければ改めるべきと考えます。位置の移動に円滑を欠き、殊に受け手として

姿勢も不自然で不利ではないでしょうか。

ここまで申して、折角の空手界での貴重な機会と心得て更に申せば、空手の中で冷静に周囲を見れば、文字通り因習に類するもの、不合理が事実で今もってそのまま残っているものが多いと言うことであります。然もこれに気づいていない人も又多いということでもあります。私は特別にと言うほどではありませんが合理主義を長く志向しており従がつて昭和二十二年空手の稽古を始めて以来いろいろ矛盾点、問題点を感じてきました。若い頃はまだ空手を始めて数年の若僧が空手の不合理性などと申すわけには参らぬと思つておりましたが もう五十年です。申すまでもなく空手には形と組み手があります。形はどちらかと言うと、かなり古くに形として出来上がったもので、この形を正しく守つて継承して行こうとする性格のもので、そして稽古の過程では、より形と、その三要諦をきちつと守つて、より美的に、且つ自らを実戦の精神状態に置いて演武することが求められます。これに対し組み手はより強く、相手に勝つことが目的となります。

一方、形は楽しむことも、体操として健康のために左右均衡の体育として老化防止、体力回復、活性化、健康維持、増進、鍛錬等々。そして組み手はやはり危険ゆえに楽しみとは指導は出来ないでしょう。やはり競技として、個人や団体の為これに勝つことが目的となります。従つて常時真剣に稽古に当たる必要があります。結果としてこの真剣さが守れるか否かは組み手として得る成果にも現れます。又、勿論強さと、自信にあふれて楽しくてどうしようもない時期もあります。このような時期は即ち伸び盛りであります、こんな時は実際に目に見えて実力をつけて自信もつけて強くなつていく時です。

何れにせよ幾分不思議に感じる場合があります。形はあくまで規定されたことを行う。若しくはより質を磨く、それに対して組み手は全く稽古の質が異なるのではないかと。研究とその合理的な鍛錬の不足があつた場合、つまり自分の試合相手との対比によって自分の優劣を正しく把握し、これを科学的、実戦的その他の稽古を通じて解決し乗り越えて試合に挑み勝利を勝ち取つて行くことであります。我々は現在それを行つていくのでしょうか。それとも行おうとしていくのでしょうか。このままで進めば勝てなくなつてしまう危惧はないのでしょうか。これらの問いは空手をたしなむ人々がその意義、問題点について自問するべき問題のように考えています。

勝敗と言う観点で言えば、現在の力でこのまま空手が進めば日本の空手は勝てなくなつてしまうのではないか。まだまだ成すべき要素を実行すれば空手が勝つべき事は少なからずある。先ず、諸賢は外来武術に勝つ研究をしたことがあるか、外来の強みと考えられるものは先ず何か、体力、力、背丈、耐久力（一般平均的に）闘争本能（同左）、科学的実証的研究とその方向性、一方、日本人は肘の小さい動きが上手で早く、腰を決め、両肩を落とし、ほぼ水平に回転して決め、両肩を落とし両脇の下の筋を瞬間的に引き手と同様に同時に締めて決め、これらを同時に決めて行えば極めて強力な破壊力を発揮する。以前あるテレビで行つた実験の結果を報告すると、NTV かどこか忘れましたがテレビ局に大きな計器を持ち込んで中型の力士を連れてきて米俵ほどのサンドバッグを吊り大きく振つて力士に腰を落として両足を踏ん張つて当たらせ所謂猿臂に近い格好でぶつからせ、その時の当たつた衝撃を測定したら何と1300何Kgと出たのを見ました。実は之は5年ほど前のことでしたが確かに驚異的と感じました。之は実際には攻撃側が相手の攻撃をどうカバーするか。その他研究すべき問題は残りますが、先ずはこの衝撃

的打撃力は大いに研究課題となる筈です。又、衝撃力もリーチが近すぎても、遠すぎても変化するでしょう。

肘の打撃力の絶大なるをお伝えして研究の参考に供したいと考えます。腰を思い切り落とし、相手の側面にぴったり着くほどに身を寄せて決め手を入れる。近間では、出来れば相手を抑えるなり崩すなり一方の手を有効に使うて有利に決め手を使えばより有効でなかろうか。本来空手とはそもそも引き手のように、自分の持つ体力つまり力を相対的にというか、相反する反動アクションと同時的に一致させて作用させることによって発揮させる打撃効果を倍化させる運動感覚には長年なれているはずであります。勿論本能として両肩も水平に十分に左右に振って切れを入れて打撃効果を倍加させるのも真に有効であることが自覚的に証明されているため前期の莫大な打撃力が仮にあれまで莫大でなくとも効果は十分。一度に同じ右なら右の肘の手を連続で二度、三度と使ってもその効果を強くアピールするのも良い策と思うし、数回なら攻撃を重ねても体力的消耗度は少ないので万一当る角度による打撃力の激減があっても打撃の有効度は高い筈。又、その位の勝負への執念は当然審判の評価を受けてしかるべきと思う。

(8) 他の格闘スポーツから学ぶ

自宅等でボクシング、柔道、相撲、サッカー、等のTV放送を真剣に見ているか。

自分がテレビで他の武術を極力見てそれを真剣にチェックし真剣に、合理的に研究していると言えるか。私は今尚それらのテレビは真剣に見ている。

(9) 前蹴りの重要性

前蹴りは、追い突き、逆突きと並んで空手の攻撃技の中で最も単純で打撃効果も高く、要するに利用価値の高い攻撃手である。動きも誠に本能的である。この前蹴りについて前記した例は抱え込みに拘り過ぎて折角の貴重なこの蹴りの価値を間違った方向に減殺してしまう例を挙げたが是非この意味を理解していただきたい。

前蹴りの稽古の目的は蹴りの威力を高めることと、スピードを早くすることである。後者は勿論威力を高める為と、自身の隙のある状態の時間を最短時間にし次に備えることである。

私は若い頃かなり長い間仕事の仲間たちと何事につけ、何かをやる時に必ずと言ってよいほど質問をした。『それは何の為に?』

『何の目的で』それはひつこい位だった。これを確實、有効に稽古中に徹底できる人がいたら優秀なリーダーと言うことができると思う。

(10) 伊藤俊太郎

卑近な例で恐縮ながら、昔、昭和15年大学卒の先輩で伊藤俊太郎と言う方がいた。とにかく強かった。ずっと不世出だと思っていた。私の知識が狭かったのかもしれないが然し100歩譲って考えてもこの方には種々実証的な例が多い。或る時学校の秋季大会で瓦を13枚、それもこんにちのような薄いのではない、当時の立派に厚い重い奴だったそうだ。まっ二つに下まで拳が突き抜けた。瓦10枚でも滅多に二つに割れるものではない。いつも合宿が終わると巻き藁の棒を抜くのが面倒だと伊藤さんが言い出す、先に腹ごしらえをと言って一人で食べだす、当時の巻き藁は柱の断面が殆ど正方形に近くその頑丈さに合わせて土中には驚くほどでかいレンガの塊を幾つも丁寧にに入れて補強してある。それを他の当時の部員が証言して正拳で記録は一人で6本折ったそうだ。終戦直後は進駐軍の会合に空手のPR活動にしばしば出向いてエキジビションをやった。アメリカ兵は食べ物と結びつけるのが好きでたいい伊藤さんの試し割りが終わると伊藤さんに何を食べているかを聞きに集まっていた。伊藤俊太郎さんを

描くのに全て事実通りで、試し割りは上記のとおりで。出足は突っ立ちで時には慶大三田道場の壁から壁までそれ程広くはないが無論狭くはないが二歩か多くて三歩で届いてしまう、突っ立ちで飛んでしまうのだ。そして決して書き落としてはならないのは何と言っても前蹴りである。あの鋭さ威力、そして速さ、私が卒業して5年の頃であったが、慶応で伊藤さんに並ぶともいわれたことのあった方だが、三田道場の建て直しの道場開きで、お二人がやるとなれば審判など着かない、ご自身で判る。右足前で構えた伊藤さんは両手をだらりと下げた様に両肘はこころもち曲げて気も充実して構えられたと見えた、伊藤さんの右前足がほんの一寸ほどずつ二度動いた、その時は伊藤さんの体が跳んでいた、然もあんな蹴りは未だ一度も見たことが無い。伊藤さんの蹴りは抱え込むなどしないのだ。蹴るためにこし(虎趾)を蹴るところに横から見ると一直線に突き出すのだ。勿論膝のバネは完全に鋭く入る。それは知っていたのだが、こし(虎趾)を上げる為に膝が上がるのだ、上げるのではない、それは最も理に適っている。そして全て足を上に上げる力もスピードも全ては膝を上げる為ではなく伸ばして蹴るためスプリング即ちバネとスピードとがパワーになるのだ。膝を伸ばして蹴る為に必要な分、膝が上がるだけなのだ。事実その通りの鋭い全く刺すような蹴りであった。本当にあれほどの蹴りを私はこれまで他に見たことがない。要は全てスピードとパワーで勝負しているのだ。

(11) 空手の三要素

空手をご承知の通り基本、形、組み手の三要素から出来上がっておりどれ一つを外しても成り立たない。しかし形には夫々の流派の伝統があり、夫々古く遡れば上るほど流派、伝統との関係が深く、形の領域まで一私見を絡ませることは考えていない。

(12) 目線

数年前、後輩が全日本防具付空手で選手権を取ったというのでそのV I D E Oを見に東京渋谷に集まった。それは大学院でドイツ文学を勉強中の外菌(ほかぞの)と言う男だが『近い間合いへ入っても最初からの目の狙いを守って離さず確実に取ろうとする。此处で大事なのは其の事ともう一つ、どうやって決め手を取る最後の間合いに入るかと言うことだ。外菌は間合いを近づける時は特に小またで左右の足をやや開き加減にして、手を軽く拳にしてほぼ両肩の前に置き、両肘から先をやや内側に折り加減にして間合いを詰めてゆく、上体をカバーする意味かもしれない、或いは本能か、前へ詰める進路は多少、右、左に相手を振っているのかもしれないがそれは確認できなかった。松涛館の空手は昔から一直線が多いがどうも年月を経ても格別の変化が見られず、相手が日本人でも、外国人でも其処に研究の成果として是非、是非変化の跡を見たい。然しこの男は決して一直線ではない。ついては今後もお互いに日々より高度に自らにより高い課題を与え自分の未来に目標と負担を与え仲間相互に夢を膨らませてほしいと願う。

(13) ウイビング&フットワーク

その防具付空手を見た折、上記外菌でない別の選手がボクシングで言うウイビングで(相手からの上段、中段への打撃を相手の打撃にタイミングを合わせて上体を前後左右に大きく振って間合いと角度で突き手を交わすこと)で交わすのを二度見た。これはボクシングではグローブを着けているから拳のスピードと面積の上で比較的やり易いが空手ではやや難しいかもしれない。私は空手で使った記憶は無いが、つかっているのは始めて見た。少しして同じV I D E Oを見た別の若い後輩が『近頃は審判が中段を取ってくれないですね』と言ったが黙っていた。

(14) 再び伊藤俊太郎さん、そして高木房次郎さん

伊藤さんは体力、パワー、スピード、度胸、感、腹など全て空手の要件を天性として備えた方であったが晩年早々からしばしば『空手は感と腹とスピードである』と私にも話しておられた。歩くときには長年の修行の習慣でつま先や踵をつけて歩くようなことをされず常に紙一重下に敷いて歩くようにしておられた。巻き藁の柱を折るのが好きで折りたがった。ひょっこり昼間道場へ現れて部員たちが見る前で二本折ってポケットからお金を出して、直しておくようにとおいてゆかれたりした。結構遊びもあった方だ。車のトランクにはいつも一式、それは稽古着、巻き藁、巻き藁の柱、備前長船の鎧通し名刀が入っていた。東京の芝浦にスケート場を作る夢があって図面で計画を進めておられた。今のような鉄鋼の景気に当たれば完成していたかもしれない。日本の空手が今後このままで進んだ場合の危惧をあげれば、重ねて書くが下記するような多くの問題点をかねがね空手が問題として取り上げ対応の手を検討しているか。背丈の差の不利を最小化する。或いはこれを有利に切り替える事。更にパワー、リーチ、闘争本能、耐久力、合理的思考。これらの問題点は決して近時に発生した問題でなく古くから存在する。今、テレビでしばしば目にする外来の格闘技の選手達との公正な比較を常々行って来たか。それらに勝つ為の思念、工夫を怠っていないと言い切れるか。精神論的に傾くことも一概

に否定はしないが現実的、合理的に掘り下げていると自信を持って答えられるか。過去の空手の考え方が合理的だと確答出来るか。引き手の拳を腰骨上まで必ず引くが、中段がガラガラ空きだと感じたことはないか？空手で攻撃に使わない手はカバーに使う必要を感じたことはないか？等々ボクシングがどれ程カバーに試合中、稽古中を通じて自分の顔面、ボディーなど全急所に対して一貫して気を払ってカバーしているか知っているか。よく現在の引き手の位置などにこぶしを置いておけるな。私は引き手は3センチから30センチの自分の随意の位置が妥当ではないかと考えている。私自身もいまだ経験が些少で不確かだがこの辺が妥当かと今のところ想像している。どなたか志のおありの方、このような組み手形に関心をお持ちの方、研究開発に着手なさる方はおられませんか。

伊藤さんは昭和42年『空手』という空手の組み手の決め手専門写真解説本を出版された。一決め手平均3、4枚程度の写真解説だがそのような空手の本は世界で始めてのことであろう。恐らく、80から100に近い組み手の決め手が伊藤さんと拓大の天才肌のOBで元監督の竹内さん他との組み手専門の本である。慶応では在学中の四段獲得は、この伊藤、高木のお二人と第一回世界選手権ならびに全日本学生個人選手権を二度獲得した和田光二君の三人が手にしているが、この高木さんも組み手は「柔」の領域を極め、晩年の形、二十四歩では形の芸術を見る思いであったが、その頃、第二代全空連専務理事、又WUKOでも誠に大きな足跡を残された。

(15) 「なぜ。なぜ。何故。の思考形態の習慣化」を。

先ず、頭を空にして試験的に新規出発のために多少の冒険も試みてみたいと思います。

世界各国に空手による試合制度が定着して、これが空手道連盟と共に公認され、既に50年を経て参加国、人口など飛躍、発展を遂げ、更に今日、空手をつつむ環境は競合格闘武術の新規参入、その中には過激なものも少なくなく、大きく変貌した。そして中には武術的にも実力を備えつつあるものも決して少ないとは言えません、問題点の発見、確認、分析、等対応を考えるべきと思う。(A) 先ず最近の外来の彼等の力と、空手を比較した場合の問題点を率直に知ること(B) フランクにこの問題点の改善、解決に向かって空手界が力を合わせて努力してこれにあたらねばならないと思う。

私の過去からの「思い」を率直に申しあげさせて頂くと、過去、数百年近くこの方、立ち方にしても前屈の後ろ膝の突っ張り方、後屈、騎馬立ち等今日まで疑問を感じたことはなかったのか。引き手を腰骨

の位置まで引き、上体はがら空きで、拳をあすこまで捻って引くことに拳や腕の動きの円滑さに問題は感じなかったか。少年時代の純真さでいつまで信じていたか。なぜ、何故、なぜの素直な疑念と確認はなされなかったか。否、みな思ったに違いない、或いは何か、所謂後で気がつく思い込みか、古くからあったから守ったと純真さへの自己満足の面があったのか？ もう改めたい。

騎馬立なども自己満足であった、一箇所と同じ筋肉に度を越えた筋肉負担が一時間も或いはそれ以上も一瞬もその筋肉を休めることなく、引きつったような状態でいため続けているとどうやら痛めた方も、痛められた方も『やった』と言うような朦朧とした妄想状態の中で自己満足感を生む。目的がどこにも見えてこない。ましてや合理性などは全然ない。前蹴りなどでも進入部員に膝のスプリングのバネを使わせる為に膝の抱え込みを強調しようとし過ぎていったん膝を抱え込んだまま胸の前で止めんばかりにして、其処から膝のバネを使って蹴るようにしておまけに蹴った足を床に戻すのにまで足をいったん抱え込みの位置まで戻すような軌道を通して戻すようなことまであったりした。これなども蹴りの本質からまったく離れてしまっている。目的と行動とがちぐはぐになってしまっているのだ。つまり蹴りの主たる目的は二つであって、一は蹴りの破壊力。二はスピードに他ならない。このようにちょっと注意して人間が『何故』を一瞬入れれば誰でもわかることがつい、気づかずに筋肉運動とってしまうような事があるものだ。これなども目的を確認しなかった為だ。何れにせよ全て、事を行うに先駆けてこの『なぜ』を明らかにして、その上で行うことは一つ空手に限らず何事につけ文字通り重要である。そして蹴りでは一旦道場の床を足が離れれば可級の速やかに不安定な体制を立て直すために上がった足を床に戻すか何かしなければならない、同時に膝が伸びる力とスピードは全て蹴りの威力とスピードに向けられなければならない。

このところ数年間のわが国の空手が直面する環境変化が文字通り歴史的な変化を迎えているように思える。日本の空手界がこれにどのように対応してゆくべきなのか、誠に大変な時代を迎えていると言わざるを得ない。

それは空手が現在一般に勝負を伴う競技として認識されるに至り、その中で各学府や団体に所属する部が精神的並びに道徳的要素の維持、高揚に努めている。これは一つ空手に限らずあらゆる運動競技がその存在価値として社会的に求められる要素として変わることはないと認識しなければならない。さて、それらの中で近時特筆すべき変化は空手において顕著となりうるのではないだろうか。それは、外来の海外格闘武術の進出である。又、これらの中には刺激的なものも少なくない。格闘武術と言う範疇で同類と言える柔道も、一時停滞の時期を迎えたが、数年前より改めて『JUDO』として組織を挙げて懸命に出直しを図り「柔道」と言う過去の観念と体面をかなぐり捨てて選手個人々の国際感覚の育成にも成功しアテネオリンピックでは見事に勝利を挙げた。ここで国際感覚と一言で片付けてしまうが、全日本柔道連盟の強化委員長の上村春樹氏の読売新聞に書かれた記事によると、例えば欧州選手権に選手を出場させ、その戦跡によってその後の予定を東京で組み替え、それによって変更される試合のエントリーからホテルの予約、エアーチケットの予約、支払いまで全て選手に現地で処理をさせる。少なくとも其処まで踏み込まないと国際化は育たないと言う。今後も激しい戦いは続く。唯、空手の場合と異なるのは若し外来武術と交わった場合、格闘の内容と競技の方法が夫々異なることである。

更に、極く最近になって発見したことに外来の格闘競技の選手の試合における感覚までが外国選手にかなり共通するものになってきたことである。それは気力、闘争本能は勿論、手数（てかず）、試合運びまでもが外国選手と共通するものをかなり実感するものがある。具体的には連続攻撃の果敢さ、チャンスと見れば一切、手を緩めることなくこれを一気に物にするまでに詰める気性とその実行、その他。それらを私は幾つかの格闘武術あるいは激しいスポーツ競技の中に最近生まれた好ましい変化と受け止

めている。これらも前述の一環であろうか。とあれば喜ばしいことである。

昭和32年両国の旧国技館で行われた第一回全日本学生選手権など初期の頃の試合には未だに鮮やかに脳裏に残るものがある。

何れにせよ世界におけるそれまでの空手は、これを5年さかのぼる昭和27年秋、早稲田の大島主将以下によってもたらされた早慶の試合によって新しい幕があけた。之が所謂学生の自主と、試合と言う武道と言う意識をいまだほぼ完全に残したまま新しい時代に足を染め始めていた。そして50年、われわれの生きてきた時代は敗戦と言う、それに続く時代を経て今ふと気がつくと意外に武道の感覚が消え失せずに残っていることに驚かされる。そして落ち着いた気持ちにさせられることに気づくのである。空手試合がこの日であった。

慶応対拓大。優勝戦とも思える番組が三回戦であたった。双方5人ずつの選手が対峙する。先鋒、慶大、策畑 対 拓大、浅井で始まる。浅井の左上段回し蹴りが策畑の右頭部に殆ど下方から蹴りが顔に近い高さになってからまわしげりになって決まった、と見えたが判定は下りなかった。浅井の体は大変柔らかく蹴るときに両手首をちょっと捻るようにして調子をとる。続いて同じ蹴りがもう一度入る、そして一本となって終わった。さらりと片付いた感じであった。そして試合は2対2の同点で大将戦を迎えた。慶大、真鍋主将 対 拓大 榎枝主将、榎枝は体躯も面相も頑強そのものでいかにも拓大の空手を代表する武人の気迫を漲らせた威風を辺りに発する人物であった。一方慶応の真鍋は細く、やせて榎枝が体ごと当たれば間違いなく飛んでしまいそうに誰の目にもうつつに違いない。しかしこの男が強くてどんなことがあっても口を真一文字に締めて閉じ、いざ大事の際には何か予想もつかないことをするのはないかと思わせる不気味なものを元々内に秘めている人物であった。じりじりと対峙する二人、脂汗が流れるように感じられる。観衆の凝視と静寂を破ってどちらからともなく耳を劈くほどの甲高いような叫びがあがったように思えた、乾坤一擲のあの榎枝の中段蹴りを真鍋は渾身の受けて見事に払い落としていた。そして体を全て張った右左の中断連突きで疑う余地のない一本をものにしていただけだった。その日第一回全日本学生選手権試合の最後は明治と慶応であった。2対2で決勝戦を迎え明治は名立たる巨漢、和歌山の岩井、之は慶応真鍋の作戦ミスもあったか終始真鍋が 間合いを詰められ押される一方の展開となった。真鍋の場外が三度ほどあり結局時間切れとなって岩井の優勢勝ちで終わったのだった。

本年もわれわれ松涛一門有志が長年欠くことなく続けている恩師、船越義珍師範の松涛祭が丁度師の五十回忌と合わせて鎌倉円覚寺で盛大に行われ改めて師の徳を深く慮った次第でした。

丁度60年の間に空手のいろいろなことに触れて、いろいろ感じてきました。いろいろ忌憚のない意見もこの際空手にとって必要だと私は思います。世界のスポーツはこれ程変化し進歩しています。世界的に見て空手に対する環境は実は大変に変わっています。それでも現在はまだ、ファンの空手に対する魅力と愛情は幸いなことに十分と言えるほど残っています。それは空手の試合制度に設立当時から深く関わって来た私共自身も驚くほどです。一つには世界に広がった空手関係者が懸命に努力し続けているからです。又、一方空手の魅力には既に薄い雲がかかりつつあることを気づいている方々もいるかと思えます。これを読む方も少々気付いているかもしれません。唯、しかし、これらの方々も皆同様に強く空手を愛しこの道の隆盛をひたすら願いながら実は過去の空手から一歩も飛び出していないと言うことに今もって気づいていないのではないかと。

(16) 猫足立のポイント

猫足立ちは柔軟で移動、変化ともにしやすく、懐も更に深く後屈立ちと比べて有利な点が多いと考えられるが何とか全日本空手道連盟の機動性と組織力を活用して猫足立ちの習熟者を増やし活用範囲を増やすことが出来れば会員たちが喜ぶと思うがいかなるものでありましょうか。

(17) 『守、破、離、』

さて、この辺で少し『守、破、離、』について少しだけ触れさせていただきたいと思います。諸賢もご存知のように足利三代将軍義満の時代に観阿弥、世阿弥父子（能の作家、歌、舞手一家が観世と称する能の秘芸を残したもので私は私なりに『人は人から諸事の伝承を受けるにあり、これを受け継いでゆく段階を此処では三つにわけ第一に先ず伝えられたものを純粹に受けてこれを守り、次の段階で此れから外れることもある程度意識しながら自らの経験や研究の範囲を広げて挑戦的に挑み、最終段階に至っては無意識のうちにも雲の中でさまようが如き境地での所作が自から全てを適えて備わっているものか、ことか、ただ、自然に在る。と言うことなのか解らないままで想像している。その辺で未熟者にお許しをいただければ幸いと申し上げるほかはない。しかし、やはりここでも破る、離れると大変に大胆な言葉が出ています。しかも足利の初期と言える時代に考えさせるものがあります。特にここで注目し、強調したいのは、あの時代に、能というひとときの封建社会の中で、始祖、家元たる最高権威者自身があえて「破」と言う言葉を用いたその意味が何か、残念ながら私は知らない、が。是が更に「離」と続いて深い意味合いを持つものなのかもしれない。

(18) 室伏浩治選手

(オリンピック金メダリストといえども進入部員と同じ)ハンマー投げ室伏浩治選手のこと
勿論彼はアテネ、オリンピックで日本か生んだアジア初のハンマー投げの金メダリストである。彼は数日前、新聞に、こう書いていた。彼は少し体を痛めて一年ほど練習を少々控えめにしていたがその間に何と 200 近いハンマー投げの新しい投技法が生まれて自分は之を全て習熟しなければならないのだと。今まで彼は何千、或いはそれ以上と言う投技法を習熟して来たに違いない。それが今、再び又進入部員のようにそうしてゆかなければ、ことがはじまらないのだ、凄まじき厳しさである。世の中どうも極限は見つからぬようである。と改めて思う。

(19) 日本人は抜群の世界一の空手の出足。となるか

私はこの文のはじめに『現在の空手はスピードと決めに絞られたようである。是は当分の間変わることはないだろう』と書いた。書き方が前後するかもしれないが、夫々の道場が一行に並んで所謂基本稽古を行うときに夫々が絶対に両隣の者に出足のスピードで決して負けないと誓って稽古してもらいたい。日本の空手は抜群の世界一の出足になるだろう。

(20) 自分固有の形と連続技

日本相撲協会は相撲では自分の固有の形を持たない者は大成しないと言う。この形を三つも持つようになれば大横綱だと。連続技が使えなければ相手には通用しない。自分の形は土俵の上で三役に通じる自分の相撲の得意技のことだ。私はこの自分の形となる組み手形を作る夢を持っているが。

全日本学生空手道連盟が昭和 32, 年(1957)に設立され、以後毎年全日本、地区選手権、地区予選の大会

が開催されることとなった。今、目をつぶっていろいろなことを思い出してみても昭和32年学連大会初日の緊張と感動はやはり一種独特で大小数多くの物語を生み忘れがたいものがある。たとえば試合でも、前記したように慶大対拓大 明大対慶大など、そして当初の20年間は拓殖大学が常にトップの三校の中か、それにちかいところにあったと決めて過言ではなかった。なくなった長老方のお顔も学連もその厚い貢献とともに思い出される。これ等初期の学生空手道連盟発祥の頃学生空手道連盟のために身を挺して尽くした大勢の方々がおられた。慶応の小幡功、伊藤俊太郎、高木房次郎、早稲田の野口宏、渡部俊夫、拓大の福井功、中島智雄、入江敏夫、明治の佐藤八十雄、長島真、法政の佐伯定、東大の石塚彰 そして今日まで全国に強豪拓大の名を轟かせた人の中に、素直で素朴で、決してガラの悪くないむしろ紳士のかわいげさえある津山克典。勿論これ以外にも今日まで学生の空手を支え育ててこられてきた方々は数多い、私が現在お名前を思い出せないだけの方も多いと思う。（以上敬称略）これら諸賢は皆学連の幕開け期もしくは極く初期から学連の役員として学連の運営の責任者としてリードし支えてきた方々であります。又、勿論学連役員以外で学連運営に長年貢献された大勢の方々のお骨折りに深甚なる敬意を表するものであります。既にときも移り人数、人名ともに不肖なことが多く之を挙げてまいることは間違いも生まれ却って失礼となる恐れもあることから残念ながら断念させていただきたく存じます。

あの頃、武道館その他、学連空手試合会場の体育館でよく歌われた元気な歌があった。勝利の祝いの歌だ「勝ってみせます、勝あたせます。勝あつて見せますうかあつたせます。」良い歌だった。(完)

望月康彦

この文典は望月先生が何年前かに空手機関紙 JKfan に寄稿された文書です。

大学の空手部に属する方達は、再度研究を重ねてもらいたいものです。